

山と博物館

第22巻 第11号 1977年11月25日 大町山岳博物館



野沢菜洗い 大町市平二ツ屋にて

撮影 千葉 彬司

野沢菜漬け

満山錦繡を誇った北アルプスの山々の紅葉も、数度の霜とその後一夜の風で、すっかり裸山となって、山肌の峻が一層目につく頃となった。

米どころ安曇野の風物の一つハゼ木の列もかたづけられ、町や村に菊祭りが催されるようになると、信州の風物詩の一コマともいえる「漬菜洗い」の風景があちこちに見られるようになる。

長い、信州の冬ごもりの生活にとって、お茶と漬菜は切り放して考えることのできないくらい、密接なものがある。浅漬けの鮮緑な歯切れのよいもの。最冬期、氷を割って引き出してきた、まだ間に氷の結晶が残っているベッコウ色の本漬かりとなったものを、炬燵を囲んで食べるもの。長い冬が残り、残り少なくなり、酸味のついたものを桶の底から引き出し、洗って酸節をかけて食べたり、食油を入れて佃煮状にしたものなど、同じ漬菜であっても季節によって随分違った味がするもので、これらの味が、それぞれ故郷の味、おふくろの味がして懐しいものである。

漬菜には一般に、「野沢菜」が栽培されているが、味を大切にしている人は昔ながらに「稲核菜」(赤菜)を作っている人が多い。野沢菜とは野沢温泉が主な採種地であるので付けられた名で、丈も大きくなり色も美しいが、漬けては小型で葉芯に赤味を帯びる稲核菜の方が美味しい。

ところが、冬の信州の味を代表する野沢菜漬けが、今では漬物業者によっていとも簡単に漬けられ、しかも味のよくない防腐剤入りの物が、ビニール袋に詰められて年中土産屋などの店頭で売られているが、ただけでない。旅行者によってそれが全国に配られ、これが野沢菜漬けの味かと思われたら大変である。野沢菜漬けの味は、その土地で、しかも桶から出して三〇分以内に食べないと、本当の味は味わえないものである。

(白馬村 長沢 武)

礼文島の植物とその地史的分布(1)

はじめに

著者の一人小林は昨春秋、陸上自衛隊礼文分遣隊司令に任せられた。丁度よい機会であるが、自衛隊に新風を吹き込む(これは冗談だが)ことにもなるから、約二十年前の植物の交友を深めようと相談がまとまった。そこで礼文島の植物目録をさがしたが入手困難であった。ふと気がついたのは奥山春季氏の著書中に礼文・利尻両島の植物目録のある事であった。これを抜き書きして礼文島に送り、利尻島の方に産するものを消し去り、奥山氏の目録以外に加わるものを記入して貰った、この作業は礼文町船泊中学校長の阿部儀氏の御協力による。謹んで感謝の意を表す。その結果新たに六十余種を加えた。それを自然分科順にならべたのが別項の目録である。

礼文島の地理

礼文島は、北海道の最北端の稚内市から西方へ約四九km離れている。しかしフェリーの航路は海底の状況により約六〇kmで、所要時間約二時間四十分で、夏場七、八、九月一日三回運行する。

- 極西は種島の東経一四〇度五七分五一秒
- 極東は高山の東経一四一度 四分一六秒
- 極南は知床の北緯四五度一六分一七秒
- 極北は種島の北緯四五度三〇分一四秒

礼文島略図



横内 悦 斎
小林 悦 郎

広さ 東西七・六km南北二五・八km
周囲 七二km 面積 八一九七km²
地質 火成岩の安山岩と水成岩の砂岩、凝灰岩、泥岩、礫岩等から成り立っている。
一島(礼文島)一町(礼文町)である。
島名の由来 礼文の名はアイヌ語レブシ(沖の島)の意から転訛したものでレブシ(礼文)シリ(島)の意から出たものである。
隣島利尻島までは約一〇kmである。
人口 二〇〇人も過疎の事実が訪れた、昭和三〇年には九八七四人をかぞえたのに、最近昭和四九年には六八四八人と約三〇〇〇人も減った。海は美しく、海藻や貝類や魚類は豊富だと言うのに。

島の最高点は礼文岳で海拔四九〇メートルあり。麓からお花畑が展開し、レブンアツモリ、レブンソウ、エゾハナシノブ、レブンナデシコ、レブンウスユキソウ、ハクサンイチゲ、シナノキンバイ、ミズバショウなどの高山植物が、黄紅白紫、色さまざま、形、姿面白く北海の天地を色どっている。昭和四十九年九月全国で二七番目の国立公園に指定された。一度は訪れたい日本最北の島である。

地史的分布概論

地史の上から日本列島の成立を見ると、白亜紀(約一億三千万年前)末には、日本の南部が大陸と分離しており、西方の今の対馬海峡のところに、東方北海道の中央部(北海道中央低地帯)のところに、夫々海が深く北へえぐれ込んでいて、沿海州から南へ一大半島がつきでている。これが日本列島の前身で、すなわち当時の日本列島は、東亜の一大



礼文分とん地(高山)から礼文岳を望む

半島だったわけである。

これが中新世(約二千五百万年前)になり日本海の成立となって、この時初めて日本列島の原型ができあがった。その後幾多の部分の陥没隆起が繰り返され、日本列島は完成して行く。同じ頃本州島中央部に静岡・糸魚川地溝帯が生れ、やがてこれがフォッサ・マグナ海となり、本州島を東北本州と西南本州の二島に分断した。これがおよそ九百万年以前の事である。

しかしこのフォッサ・マグナ海もやがて隆起を始め、ほぼ陸化が完成し、一部入江の形となったのは、約八十万年以前のことである。この間火山の噴出による地殻の変動がごく近頃まで続いた。

同じ中新世のはじめ頃、北海道中央低地帯も陸化し、東西に分れていた北海道も合わさって、現在のような北海道を形成した。ここにも大雪火山帯のような火山活動が起きた。

降って洪積世約二百万年の後半(約百万年前)になって、北半球は酷寒気候の氷河時代になり、現在の東京の気温が、今の北海道稚内の気温と同じ程に低下した寒い気候におそわれ、日本アルプスの諸峰には、小さいながらも懸谷氷河をかけ、高山植物はわが世の春をうたって、現在よりも一層低い所にお花畑を現出した。この時代には北の海はほとんど凍り、海水面は七〇〜一〇〇メートルも低下したというから、北方の諸島は陸橋でつながれ、北方に根拠を置く植物は、陸橋伝いに続々と南下したと思われる。

一方間氷河期には、これと逆の現象を呈し、南方の暖帯気候の支配下にある植物が北上した事であろう。今日北海道胆振口登別温泉に見られる熱帯植物のミズスギなどは、かくして分布したものの子孫であろう。かよう寒暑両極端の変動が四回も繰り返されたのである。

この地史時代を踏まえて、日本列島の植物分布にメスを入ねて見よう。

被子植物の出現は、白亜紀前後といわれる。丁度日本列島が東亜の一大半島をなしていた頃の初期である。これから中新世に日本海が陥没して、日本列島の原型が出来あがるまでの約一億一千五百万年という長期間、日本列島の植物は、大陸から供給をうけ、列島内に分布すると同時に、種々の外界の変転推移によつて分化新生が行われ、新種、新変種が形成された。この古い分布型式が今も日本列島内に残り、これを指摘することができる。これが私の称える地史(学)的分布である。

地史的分布は、これを前期と後期に分ける。前期は、日本列島が大陸の半島だった時代に、その年数も約一億一千五百万年の長期に涉り、大陸から種が盛んに移動分布し、一方分化新生も行われた時代で、これを東亜森林植物の解明に異状な熱意を示された、故東京

帝国大学名誉教授中井猛之進博士を記念してナカネシア *NAKALESIA* type と名づける。この分布型式は以下の五つの型から成っている。

飛び越し型分布 *Over Japan Sea type* の型は、大陸から直接種が信濃に供給され、日本海の陥没によって、種の分布が大陸とその土地だけに残るといって、日本海を飛び越え、諸地域を飛び越して、長い間隔をへだてて隔離分布しているものである。詳しくは小著「長野県植物分布由来」など参照。以下同じ。

南まわり型分布 *Southern type* は、大陸、朝鮮半島、九州、四国（入る場合と、除く場合がある。これは種の分布の年代的相違に基づく）、本州島の経路をとるもので、その分布経路を南寄りにとったもので、ある場合には朝鮮半島を欠くことさえある。更に九州、琉球、台湾、フィリピン諸島、マレーシアか



場合もある）、九州、朝鮮半島と、日本海を取り巻く土地に分布する型である。本型は北より一巡したとか、南より一巡したとか、また南北両方より分布して来ている地点で出達したなどと考えるよりも、前記したように一斉に分布して来たものが、日本海の陥没によって、日本海をめぐる周辺の土地に残ったと見るのが妥当であろう。これと次の型は、自著校正中気がついたのであるが印刷進行中であつたので、ここで修正する。従って南まわり型、北まわり型、固有種などは解体して、本型等へ直して欲しい。

大陸共通型 *Continental type* は、前記諸型が中国を含めた東アジアと連絡あるのに対し、本型は、それ以外の大陸と共通するという意味で、例えば中国からヒマラヤ、それが南に延びて印度、更に西してアフガニスタンというような場合、或いは北半球の亜寒帯と共通とか、北米大陸と連絡があるとか、また

らインドネシアへの経路をとっているものもある。

北まわり型 *Northern type* この型は、大陸、樺太、北海道、本州と北側を分布経路にとる型で、前者にくらべて、気温から言えば低温度である。この型もまれには樺太を欠く事がある。これは同島が北にいちじるしく偏在することによるからである。即ち東亜から直接北海道に供給された種があるからによる。

更にまた本州、北海道、千島列島、カムチャッカ半島、ベーリング沿岸地方、アリューシャン列島とより北方に分布経路をとるものも見られる。

日本海めぐり型 *Circumlae Japan Sea type* この型は、比較的広い範囲の温度に適應する能力をもつ種の集団で、東アジアの各地、例えば、中国、満州、沿海州、ダフリア、シベリア東部などから一斉に日本列島に供給され、樺太（欠く場合もある）、北海道、本州、四国（欠く



は南米、あるいは濠州やアフリカと共通など、各種の場合がある。要するに東アジア以外の大陸と共通性があるの言う。

固有種 *Endemic type* この型は、日本列島の特産種ということ、他所には絶対に産しないものを指す、いわゆる日本列島型分布 *The type of Japan Islands* である。この型に入るものには、四大島または三大島などの広範囲に分布するものから、一小地域を限って分化新生した稀産種を含むなど、分布域に広狭の中が非常に広い。しかし将来中国の植物界が更に明かになると、この中から共種が生まれる可能性がある。

これを要するに、地史的分布の前期分は、その分布が大陸と関係がある種と、日本固有種とから形づくられているという事である。地史的分布の後期は、東京大学名誉教授前川文夫博士の提唱される所を拝借することが一番便利で解説もしやすく納得もいく。

エゾタカネナデシコ 高山

関東地域系 *Kanto Region* は、本州で最古の地層を持つ、北上山地より南と、関東地方の全域を指すもので、気候帯で言えば暖帯の接点である。

フォッサ・マグナ地域系 *Fossa - Mariana Region* は、本州島で最後の陸化した地域で、殊に火山活動がはげしく、それによる地形の変化、各種放射能的作用等は、種の分化にあずかって力があり、新種が形成された。この地域のもは陸化に従って四周から植物が侵入したのでそれを母体として分化している。

雙連紀地域系 *Sohyuki Region* は、九州、四国、中国、近畿、東海の太平洋岸ベルト地帯で、気候帯で言えば暖帯系である。間氷河期には、この地域の植物が北上分布したもので、現今随所に残されたものを指摘でき、証拠だといえる。

日本海地域系（裏日本地域系） *Japan*

この分布系統は、日本列島が大陸から分離して現在の日本列島となったものの分布系を説明するもので、この分布系統を植物学の泰斗故牧野富太郎博士を記念して、マキネシア地域 *Makinesia - Region* と名づけた。そして北海道中央低地帯を界として、それより西と本州、四国、九州の日本列島の大部分を含む地域を西マキネシア *Western Makinesia* と呼びそれより東と、樺太、千島列島を含む地域を、北マキネシア *Northern Makinesia* と命名した。

北マキネシアは、大陸と関係がなく、日本列島とも直接関係がない、独自の分布域を作っている。気候帯で言えば亜寒帯である。西マキネシア地域は、気候帯から見れば大体温帯圏に属するが一部は暖帯圏に入る。この地域は以下の五地域を作っている。

蝦夷陸奥地域系 *Yezo - Mutsu Region* は、北海道中央低地帯より西半分と、本州の日本海側を除いた奥羽地方の全域におよぶ、気候帯で言えば温帯である。

Sea Region は、青森県の北部から島根県に至る日本海側斜面の地域を指している。気候帯から言えば豪雪地帯である。しかし一面から見れば、この豪雪は、植物の種の保存に、寒気候からその生命を守るのに一役果たしている。

史前帰化植物 Prehistoric — naturalized Plants は、帰化植物の考え方に、一つの別方向の考えを導入したもので、これによって日本人の旧時代の生活を立証する一つの手がかりともなると言える。これを要約すれば、日本古代三世頃、稲作その他の農業が導入された、同時にその現地の雑草も無人為に渡来し、それが現在田畑やその畦畔すなわち、人の生活と深いかわりのある所に繁殖しているというもので、それが、当時の帰化植物である。これらを総称して史前帰化植物 Prehistoric — naturalized plants と称しようというもので、まことに帰化植物に対する画期的な考えであり、一大躍進であると思う。何の記録もなく草も語らないが、この事実は考えを立てる上に重要である。このような思考とその他科学的事実とを対照して史前帰化植物は成立する。一千七百年という年数は人生にとつては長期であるが、地史の年代から見れば、一瞬にも値いしない。

帰化植物 Alien Plants とは、本来のフロラと異なるフロラを有する地域から、人類を介して意識的または無意識的に移入され、生育繁殖するに至った一群の植物である。意識的に移入したものを目的物から見ると、食用鑑賞、飼料、肥料、材用、砂防用、薬用、織維用、紙料用、油脂用等多岐に涉り、その原産地も世界各国に及んでいる。これらが原因で園圃から逃げ出して生育するものを、特に逸出 escaped 植物と呼んでいる。

これとは別に無意識的に、各種の輸入品、例えば食料、肥料、飼料、機械等に附着あるいは混入してきたものが加わり、広義の帰化植物群を構成する。それも徳川中期以後本草

学が発達してから今日に至るまでの期間であ

白いジネズミ

私は昨年の三月に長野県大町市で採集されたアルピノのジネズミ(雄)を山岳博物館の千葉彬司氏のご好意によって調べる機会を得たので簡単に報告しておきたい。

これは昭和五十年十月に山岳博物館へ「爺ヶ岳スキー場で白いネズミを捕らえたけれどもとの様に飼育したらよいか」と持ち込まれたもので、採集者の話によると採集場所は大町市大字源波、爺ヶ岳スキー場(海拔八五〇〜九〇〇メートル)で、落葉の上を歩いているところを捕らえたという。

ジネズミは昆虫、クモ、ミミズなどを食べている食虫類の一種で、トガリネズミによく似ている。本州では、平地より海拔一〇〇〇メートルくらいまでの畑、雑木林などに生息しているが、生態はよくわかっていない。

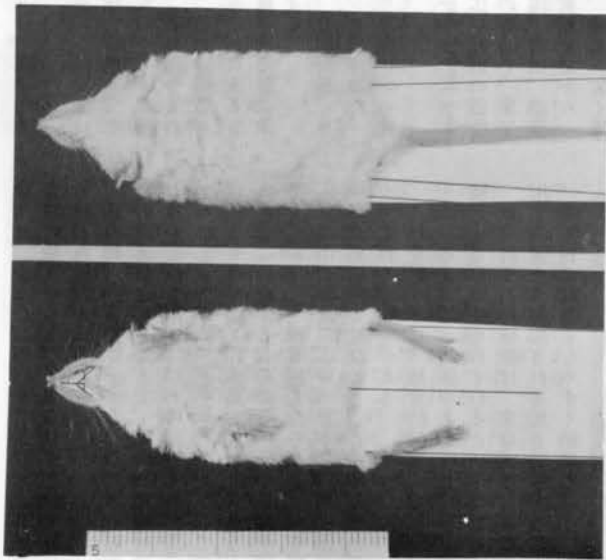
アルピノのジネズミの特徴及び外部形態。

体毛が完全に生えそろった幼仔で、体の背面及び腹面の毛は純白。毛の長さは背の中央で三ミリメートル前後。手足の毛及び尾毛のすべての毛は純白であった。また、目は生きている時に千葉氏が観察したところによるとピンクがかった赤目で

る。(東筑摩郡四賀村)

山口 佳秀

あったという。八〇%アルコール液にて固定後の計測値は次の如くであった。全長七四・五ミリメートル。頭胴長四三・三ミリメートル。尾長三四・五ミリメートル。後足長(爪なし)一十一・五ミリメートル。耳長六ミリメートル。また、頭骨全長(門歯とも)は十七・五ミリメートルであった。終りにご教示いただいた国立科学博物館今泉吉典博士にお礼申し上げます。



博物館だより

扇沢よりカモシカ下山
10月28日扇沢カモシカ園で飼育されていた2頭のカモシカが、山博放養園におろされました。

「寄付ありがとうございました」
「山と博物館」協力費
六〇〇〇円 東京都江東区亀戸三丁六一
一 二十一 栗原 一哉 殿

人事異動

10月1日付で、山田民郎主事が、観光課へ荒井今朝一学芸員補が福祉事務所へそれぞれ転出、宮田寿男主事、飯島八郎主事が着任しました。

図書紹介

北アルプス夜話 長沢 武 著
著者は北アルプス山麓の白馬村に生れ育つ。北安郡誌の調査委員、山博調査員などとして中広く調査活動し、長年にわたり資料収集したもののなかから、その一部をこのほど単行本にまとめ発刊した。
今では殆んど消え去りつつある。古来の山麓文化をこまめに収集した伝聞などは、興味深いものがあり、北アのローカル文化を知る上で貴重な一冊といえる。
(九〇〇円 信濃路)

山と博物館 第22巻 第11号
発行所 長野県大町市TEL②〇二一
印刷所 大町市 大町山岳博物館
大町市 大町市 大町市 大町市
印刷所 大町市 大町市 大町市 大町市
定価 八〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野一三、二九三)